彼女は、凡てのことを了解することが出來たけれども、無駄な報酬の前に凡ての女が持つ哀れな、柔さしい視線を彼に向けた。哀れなマリアーノよ！　凡てのことは彼等の間に終つて了つた

彼女は、只其艶やかな眼でのみ物言はせてゐた時分、あの可なり長かつた優勢な受身の時代の淑やかな貴婦人の態度で、手袋の儘の手を彼に差し出した。

「左樣なら、先生、お大事に遊ばせな……妾はもうごうも思つてやしなくなつてよ。凡てのことが熟く解りましたわ。道を知りましたわ。貴方は御勉強をお續け遊ばせ、澤山お描き遊ばせな…」

今や、誰れも、決して踏まなかつた閉ざされた敷石の上を神經質に踏みにじる靴音が遠のいて行つた。華美な扮裝は線を引いたやうアトリエに最後の香水の泡浪を殘して行つた。

レノバーレスは、唯一人の我れに歸つて、自由な氣持ちで快い呼吸をした。生活の誤解は永久に終つて了つた。此會見からは、唯伯爵夫人が、新しい肖像畫を認めるのに少しためらつたなど云ふ事のみ彼に感じさしただけだつた。彼女も亦コトネールと同樣に認めた。併し、彼女も亦ためらつた。何人も亡妻を記憶して無いのだ。唯彼だけ想像を見守つて居たのだと、彼は確信した

彼は、其午後又訪問者の跫音を女關で聞いた。快活な騷々しい足ごりから察して娘のミリータが來たのだと思つた。彼女は滿面に笑みを含み乍らアトリエに現はれた。彼は又何か不平なことを持つて來たのだなと、其笑みの陰を推量し乍ら、父らしく笑ひ乍ら迎えた。

ミリータは、長い間訪問しなかつたアトリエを物珍しさうに見廻したが、はつとしたやうに

「あらつ！　お母樣の……」

と、彼女は或驚きを以て肖像畫を見た。而し、藝術家は彼女の畫を認めた敏活さに滿足をした遂に！　彼女の娘も！　爭はれぬ血統よ！……

「どうお前は思ふ？　氣にいつたか？」

と、哀れな藝術家は恰も一介の畫生のやうに心配さうに畫のことを彼女に質ねた。

ミリータは漠然と答へた。

「さうね。本當によく描けて居るわ。でも之れ程美しくはなかつたやうだわ。」

彼女も亦生前の母を畫のやうに考へて居らなかつた。

「いや、本當だよ。お前はお母さんの若い時を知らないからさう云ふんだが、お前の生れる以前は、實際此通りだつたよ、あの可哀相な、お前のお母さんは非常な美人だつたよ。」

こ、藝術家は云つた。併し、娘は此幻像の前に偉大な情緒を示さなかつた。彼女は何も知らなかつた。父の心の動搖、亡き母への追想、そして憧憬を此繪から特に根强く考へさせられなかつた。彼は突然柔さしい氣持になつて、眼が濡んで來た。そして娘に接吻した。

「ミリータ、お前、お母さんのことを思ひ出しはしないか…善良なお母さんだつたこ信ずるか?」

娘は父の悲しさうな表情の爲め、悲しくなつた。併し、其れも一瞬間だつた。彼女の生氣、健康、生活の喜悅は、直ちに悲しい印象を消した。

「ええ、本當に善い方だつたわ。時々思ひ出してよ……」

こ、彼女は答へた。恐らく眞實を云つたのだらう。併し、其記憶の言葉には深刻な痛々しさはなかつた。死は彼女に見えざる遙な、そして少し怖い感じより他のものを與へないやうに見えた

「哀れなお母樣! 本當に可哀想なお母樣だつたわ。何時も病氣で、悲しさうだつたわ。悲しみ續けた生活だつたわ。そして死んで了つたのだわ。」

こ、彼女はつけ加へて言つた。併し、彼女の言葉は彼女自身の健康を喜んで居るやうに見えた凡ての者は死ななければならぬ。そして弱いものは早く死に、强い者は殘る。彼女は健康の殘虐な

そして無意識な利己主義者だつた。彼も亦脆弱さを灼く力の持主だつた。ミリータは肖像を脊にして、彼の方に進んだ。彼女は母のこども、父の作品も忘れて居た。彼女は他のここでやつて來たのであつた。彼性の虛榮を滿足さす爲めに、父のポッケットから無理遣りに金を取つて歸つて行つた。

黃昏は悲しかつた。レノバーレスのは、ホセフィーナの幾多の肖像畫の中で最も眞を現はして居るこ思ふ無稽にも美しい其畫頭を見續け、妻の幻像の前に永久に身動きもせぬ人のやうに座り續けて居た。彼の考へは、アトリエの隅から忍びよつて來る暗闇の中に沈んで行つた。唯、外の樹林の黑影を横切つて朦朧たる霧深い、そして蒼白めた光線が、ガラス窓から震え忍びいつて居た。

唯一人、永久に唯一人。彼は、あの健康な美を誇る、そして若い女性こして虛榮をのみ滿足さす無感覺な喜悅を運ぶ、あの娘の慈愛を有つて居る。又彼は一日も逢はずに居れない老友コトネル、老いた犬の粘着さを運ぶ、あの親友を有つて居る。

是が凡てだ。唯其れだけだ。

彼は老年に近づいて、彼を導く憂愁な、淋しい、單調な路。噫！ 其道に見える殘酷な、そして赤みを帶びた光りに眼を苛だたせ乍ら、見詰めなければならぬ。……そして遂に死、死！

何人も之を知らない。而し、確實なことだ。而し乍ら、彼は生涯の大部分を死に就て考へず、又死を見ずに過して來た。娘のミリータは確實な事實として死を語つて居た。而し、恐怖の震えは無かつた。其れは餘りに遠いことであつた。彼女には其れが到着するのに非常に遲くあるだらう多くの場合否屢々死を唇にしても、其思想は言葉の意味を證さない唇で、夢幻と希望との生存を愛し、同時に生きる事を感じて居るのだ。

死は廢滅の終りである。何人も其出會を拒むことは出來ない。而し、凡ての人々は其出會の遲刻を乞ふて居る。野望、熱望、愛、そして凡ての動物の殘酷な必需は、死の方に其の進行に連れ人を惹きつけて居る。死は森の如く、谷の如く、蒼空の如く、否凡ての路を導く底知れぬ眞黑い咽喉の中に、生命の限界、旅行の終りをつけて、路をつくつて流れる廣々とした鏡の河の如くである。

彼は今や最後の旅の其路上に立つて居る。現存の路は淋しく悲しい。植物は小さくなつて居る

大きな樹々は、稀に而も其水々しさが無くなつて居る。今や其眞黑い咽喉の底が見えて居る。彼は無闇矢鱈に此底の方に進んで來た。以前地平の彼方に閉ぢられて居た輝やかしい實を以た幻の野原は、今や遙か後ろに殘つて居る、再び其を取りかへすことは不可能だ。何人も此路から過ぎ去つた路に引き返すことは出來ない。

彼は愛の喜悅を期待し乍ら、富と榮光の爲めに其半生を鬪つて來た。……死！ 何人か之に就いて考へただらうか？ あの當時、死は感じの無い、遠い脅威であつた。彼は天の使命を信じて居た。死は敢て彼に來ないだらう。彼の仕事を完成する迄は來ないだらうと信じて居た。……然るに彼の路上の地平の中に、偉大なる忘却、死が現はれて居る。

彼は死を見やうとはしなかつた。旅人の力、其足が力强き故に、長延かされたと信じ得る路上に、偉大な旅行が未だに彼に殘つて居ると信じた。而し、噫！ 年は、年は、進む。其處に居ると云ふ確實さを一瞬間も彼に自覺させずに、常に地平の終りを彼に見せ、底知れぬ咽喉の中に確實な視界を作つて年は進む。其れは一歩も立ちどまらせずに引つぱる超人間的の力だ。噫！ 生れたことの不用さを咀はしめる。此パンを燒く實在さを力强くも、蔽ふ地平を脫れ行く虛僞の雲

よ！

五

藝術家レノバーレスの舉動は變つて來た、そして遂には、凡ての友人達の嘲笑を買ふやうになつた。アルベルカ伯爵夫人は、段々外々しい馬鹿叮嚀さで彼に對するやうになつた。

「少し氣が觸れて居るのだわ。もう畫家も終ひだわ。前のやうな元氣が少しもないんですもの。あゝなつちや駄目ね。」

と、彼女は人毎に語り聞かせて居た。

親友として固く自分を信じて居るコトネールは、有名な巨匠としてのレノバーレスに下される色々な批評を聞かされる度びに腹を立て、そして忠告するのだつた。

「無茶酒を飲むのは廢め給い。誰が、ごんなことを云つたつて氣にすることはないよ。ね、君、しつかりしなきや駄目だよ。」

コトネールは、レノバーレスに對して同情ある見解を有つて居た。困難な生活にかくされて了

つたと信じて居る凡ての神祕に餓え、丁度青年時代の情熱深い志操に似た苦しい現生活の希望を熱く知つて居た。

コトネールは、藝術家の變つた素持り、新しい習慣に眼を見張り乍ら心配し注意して居た。そして彼に云ふのだつた。

「君は段々惡い人間になつて行くやうに思ふよ。もう老年期の僕達だ。ごんな健啖なものだつて君のやうな無茶なことをしては駄目だ。人は笑つてるぜ、マリアーノ。」

彼は眞實の心から忠告はしたが、知らず識らず畫家の新しい生活に引つぱられて行つた。遂にコトネールは、彼と一緒に生活しやうと貧しい家財道具を持つて引つ越して來た。

屢々コトネールは、不平を云つた。何んの爲めに彼と一緒に棲まふと思つて來たか？……彼は終日置き去りにされ、信用ある支配人のやうに大きな淋しい邸宅の中に殘されて居た。而し、老いたる漂浪者は、飽く迄も彼の生活を見守つて居た。屢々アカデミアの門に夜、集つた美術學校の生徒達は、人の注意を惹く奇妙な風體の、其外套を頭まで被つて居るレノバーレスが、アルカラー街の歩道を過ぎるのをよく見かけた。

「あすこにレノバーレスが行くよ。あれだ、あれ！　頭から外套を冠つてさ……」

と、彼等は口々にしやべり乍ら、恰も何かを待つて居る沈默な鳩のちよこ〳〵飛びのやう、廣い人道を往つたり來たりしてる有名な畫家を不思議に思つてついて行つた。歩きくたびれた人のやうに、もう向ふへ行かうとも思はないのかと、或カフエーに入る彼を見た。好奇心に燃えた若者達は、ガラス窓越しに彼を窺ひた。彼等は、常に同じコニャック酒の一杯に茫乎りした眼を向けて、椅子にくずれ落ちて居るやうな彼を見た。藥でも飲むやうに一息に其れを飲み乾すと、彼は勘定をし、早急に出て行つた。又、或時は、其すつぽり冠つた外套の中から貪慾な眼を光らせ唯一人で歩く婦人達の誰にでも穿鑿好きな尾行を續け、若い婦人の散策、疲れに立ち留まるやうな時には、彼も又、立ごまつて頭の上から足の先迄眺めるのだつた。遂に彼がある女性を犯しでもしたかのやうに、とぼ〳〵と歸りの路を力なくも歩いて行つた。而し、尙も道行く婦人達の姿に眼をやる彼の遠のく姿を、學生達は見かけるのだつた。若者達は、偉大な藝術家の好みと選擇とを知つた。其れは、苦々しい弱々しさうな眼を持つた、そして悲しみの花を運ぶやうな、華奢な病身らしい少女であつた。彼の不思議な彷徨の解釋は、彼の周圍に渦卷いて居た。彼の敵達は

其事を彼等のアトリエで語り合つた。

肉を賣る凡ての女達の店では、高慢な氣のきいた風をして、ブルゴス生れの女らしい容貌の高等内侍らしい慇懃さで男を惹く街頭の貴婦人達から、危險な處で、毎夜の如く男を惹く、哀れな濕つぽい淫賣婦達に到る迄、大笑ひの中に或る紳士の事で話は持ち切りだつた。彼は、自分の前を過ぎる女の下袴を見、其氣の利いた着こなしから魅せられるやうな歩みを續けた。彼は或恐れを以て暗い門を通つて、生活の悲慘を匂はせるやうに思はれる危かしい段梯子を登つた。そして彼の希望を實現する前に死にはせぬか、或は又、時が無くなりはせぬかと、大急ぎで手を握りしめ、裸体の姿を見やうと駈け上つた。女達の冷めたい眼の中には男の醜い慾、劣情を嗾そうとでもするやうに、職業的な媚がをふくんだ細眼の動きが流れ、點り込んで見續けて、椅子に沈んだ男に微笑みかけ、「もう少し、もう一寸」と男が夢中に叫ぶのを聞かぬやうな思はせ振り、ぱらりと羽織る衣裳の薄物、安香氣の薫が彼の鼻をついて、寒冷と悔辱とのみ荷づけられたやうに彼は思ふのだつた。殆んど常に、このやうな不愉快な光景を幾度繰り返したことか！　そして女達は、恰も泣いてでも居るかのやうな彼の苦痛、極りない表情を見て、可笑しがつた。彼は外套を

冠つて、あはただしく脱れるやうに此家を拔け出で乍ら、而し、尙も街頭で婦人を見乍ら、其れを裸體にして見度い熱烈な希望に震える飽くなき好奇心の惡魔を、心から追ひ出さう。そして又再び見まひ、再び來まいと確固とした決心をして、恥ぢ、悔るのであつた。

此樣な噂が、漠然乍らコトネールの耳裡に入つた。噫！　マリアーノ、マリアーノ！　彼は、レノバーレスの夜の生活の恥辱を面責することは出來なかつた。否、敢てしようともしなかつた彼は藝術家の熱烈な性格の爆發を恐れた。注意深く彼を導かなければならぬ。而し、畫家の嫉妬をそそらしたものは、レノバーレスを圍む若い男達、活氣ある青年達だつた。

レノバーレスは、彼の生活の若返り法として、青年達と友になり度がつて居た。遂にコトネールは、息子と云つても可い位な青年達、即ち新しい友人達に取り捲かれ、カフエーで打ち興じて居る彼を見出した。彼等は大抵畫家であつたが、未だ畫を始めたばかりの青い美術家、人ずれのした惡口を持つてるぐらゐが高々關の山の青年達であつた。すべての若者達は、有名な藝術家と友情を厚くした滿足さに醉ひ、彼を恰も彼等の眞實の仲間の一人の如く惡ふざけるのだつた。彼等の內で前も圖々しい、そして馴れ〳〵しい男達は、彼を「お前」と呼び掛け、彼の榮光ある廢

墟を棄て、更に新なる藝術の軌道を辿るべきだと解いた。

コトネールは叫んだ。

「マリアーノ、恥しくないのか。こんな馬鹿げた生活をしてどうするのだ。君は子供に取りまかれた學校の先生のやうに見えるよ。あんな奴等と交際するのだけは止め給へ。ね、僕は賴むんだ。」

レノバーレスは寬大な微笑の內に聞きながして居た。彼等は非常に同情深く、そして彼を樂しまして呉れる。彼は彼等の中に青年時代の歡喜を味つて居た。彼は彼等と一緒に劇場や音樂會に行く。彼等は多くの婦人を知つて居る。何處に良いモデル女が居るか知つて居る。そして彼は彼等と一緒に、一人で敢て行けない色々な所にさへ行くことが出來た。

「君の親切は解り過ぎるぐらゐ解つてるよ、而し、若い者達は良くして呉れるよ。僕は嬉しいんだ。色々なことを知らして呉れたよ。……此處はローマぢやないから、君だつて何處へ行つたら、良いモデル女があるか知らないだらう。若い連中は其れを見つけ出すに妙を得てるよ。要するに、あの子供達は僕の案內人さ。」

と、哀れな藝術家は無邪氣な惡戯つ子のやうに云つた。そして尙もあの若い時代から頭腦の奥

に入れてあつた不朽の裸形、フリネーの畫、其偉大な藝術的製作のことを語り續けた。而し、彼は働かなかつた。繪畫に對する昔の活氣は失せたかのやう、唯專心に生活の若々しい、そして新しい雰圍氣にのみひたり度がつて居た。眞面目な弟子のソルデビーリャは、師匠の質問に呆れ、段々遠のいて了つた。

「お前は、懇ろにした婦人が澤山あるだらう。其可愛いい無邪氣な顏で方々を漁り廻つてる筈だな。どうだい。僕も一緒に連れて行つて呉れないか。」

「先生！」

と、驚き呆れた若い畫家は、結婚して未だ半年にもならないのに夜、家をあけることは出來ない。そして又冗談にしても大抵にして呉れと、腹を立てゝ歸つて了ふのが常だつた。

レノバーレスは輕蔑的な視線を以て答へて居た。こせついた生活のソルデビーリャ！ 青春の熱のない、そして喜悅のない男！ 世の中の多くの男達は、高いカラーと狹いチョッキの中で藻掻いて居る。何んと云ふ蟻共か！

かくして、藝術家は再びあの口の惡い、無遠慮な、夜遊びの仲間に、新しい熱心さを向けた。

此奇異な生活の噂は、娘の耳裡にも這入つた。ミリータは父が氣が觸れて居ると云はれる毎に駈けつけ、父をなだめ、すかさうとしたが無駄な努力だつた。彼女の夫、ローペ、デ、ソーサは有名な畫家として舅を尊敬し、又一面、其奮鬪的生涯に絡はる病氣勝ちな、善良な、同情深いホセフィーナのことに就て同情を寄せて居た。彼は舅が苦い過去の生活より浮れ出でたやう、近頃の娛樂萬能の生活に本能的共通點を見出して、舅に同情し、そして更に新しい方面に遊び出す舅を見ると、尙一層の親しみと懷しみとを示すのだつた。

彼等は、夜、劇場や音樂堂で、聽衆の嵐のやうな拍手裡に歌や足の震えの終つた頃、其處に來合はせた貴婦人達に挨拶して居た。レノバーレスは髮のふさ〳〵した若い人々に取り捲かれ大腕椅子におさまつて微笑み續けて居た。ローペ、デ、ソーサが常に華美な禮服を着て、友人以上の親しさを以て毎々しい扮裝の魔性の女達と語り合つて居るのを、レノバーレスは瞳を輝かせ乍ら滿足げに眺めて居た。コトネールは、嫌々乍ら是等の綺羅びやかな集會に引きづられて來て居た

「今夜一緒に行かないか。君の好きな處で飯を食はすからね。其れから一寸、僕は君に見せ度いものがあるのだ。あるものをね。」

と、藝術家は、コトネールに秘密を明かす人のやうに囁いた。コトネールは不安な氣持を續けて、劇場に伴はれて行つた。合唱團の女達が舞臺に現はれると、レノバーレスは椅子から身を乘り出し、眼を大きく開けて、而し、其眼は充分の食事の爲めに甘い醉裡に這入つて居るやうにとろりとさし、肱でコトネールをつき乍ら云つた。

「君、一寸見たまへ。右の三番目の小柄な女を、黄色い上衣を着た女だよ。」

「うん、見たよ。あれが何んだよ。」

と、老いた漂浪者は苛々した聲で云つた。

「もつと熟く見たまへ。誰かに似てないか。君は誰かを思ひ出さないか。」

コトネールは、其れに冷淡な調子で答へたが、レノバーレスが稍々じれた聲でホセフィーナに似て居ると云ふのを聞くと、其安靜な心を擾され、驚いて彼に云つた。

「マリアーノ、君は何處に眼を持つてるんだ。あの蒼白めた死人のやうな顔の何處が奥樣に似て居るかよ。まるでしなびたアスパラガスみたいぢやないか、ホセフィーナに似て居る！　馬鹿々々しい。もう之れ以上言ひ度くないよ。」

レノバーレスは、友の批評に苛々して來たけれ共、熟く見て居る中に其言の確實なのが解つて來た。彼はコトネールより立派に亡妻のことを見分けるものはないと思つたからだつた。二三日過ぎて又彼はコトネールに「君に見せ度いものがあるんだよ。」と、愚かしくも聲を潜めて囁くのだつた。そして彼は老いた友を無理に音樂堂に連れて行つた。其處で生氣の失せた顔の、腹のぶく〳〵した、やせた足の女を指さし乍ら、彼自身の眼を疑つて居るかのやうな或恐れを抱いて質ねるのだつた。

「君、あの女はごうか、似てないか。君はごう思ふ？」

友は怒り出した。

「君は馬鹿だ！　何の爲めに、あの善良な、柔しいホセフィーナを、こんな、こんな羞恥の無い犬みたいな女に似せやうとするのか。」

レノバーレスは、彼の記憶の眞實を疑はさした色々な幻滅の後、もう友に相談すまいと決心した。そして更に新らしい女を探さうと思つた。コトネールは呆れ返つて了つた。

「又探すつもりだつて……馬鹿なことも好い加減にしたまへ。そんな考へは棄てて了ひたまへ

若し、君がこんなことをしてると人が信じたら、君を氣狂ひだと云ふよ。」

而し、藝術家はある夜又熱心にコトネールを誘つた。其れはマドリッドの町端れの低級な劇場に出演して居る西班牙女ベーリヤ、フレゴリーナと云ふ女を見に行かうとするのだつた。彼は既に二週間も毎晩其女を見に行つて居た。

「本當にこんごの女は君に見せ度い。是非君に見て貰ひたいんだ。一寸で可いいのだ、是非賴むから一緒に行かう。僕の眼が間違つてないと云ふことを君も屹度信ずるから。さあ、行かう。」

コトネールは、友の熱心な懇願に打ち負かされて默諾した。彼等は、群集の牛のやうな唸り聲に伴つて歌や踊りを見たり、聞いたりし乍ら、ベーリヤ、フレゴリーナの出演を待つて居た。レノバーレスの云ふ其驚嘆に値する女は、最後に出るのだつた。遂に注目の沈默の中に、ある壯嚴さを帶びて、此低級な看客の誰でも知つて居るやうなォーグストラにつれ、舞臺に淡桃色の光線が漂つたかと思ふと、ベーリヤが現はれた。彼女は、痩せた限界をからうじて保つ程のしなやかなさを有つた小娘だつた。ある甘い憂鬱さを有つた其顏は、彼女の容貌の著しい美點だつた。縱に銀線を引いた黑い衣裳の下に、廣い下袴が裾短に纏はれ、骨を蔽ふに必要なだけの肉を有つた

細々しい脛が現はれて居た。彼女の人眼を惹く第一のものは、其眼、其大きな澄んだ處女のやうな眼であつた。而し、つややかな生氣のない顏全體の表情から、充分に處女の尊貴が失はれて居ることが明瞭であつた。彼女は光つた弱々しい肱を露し腰に手を置いて、花嫁のやうに羞しげに微笑を觀衆に送ると、大きな聲で歌ひ出した。挑發的に腰と腹の醜く振れるのを意にとめぬのか觀衆は淫らな唄に喜悅したかのやうに、奇快な聲援を送つて居た。

畫家は、彼女の現はれるのを見ると、肱でコトネールを突いて、心配さうに彼の意見を待ち乍ら、敢て話さうともしなかつた。彼の眼は試驗の結果を待つ學生の其れのやうに憫れげに震えて居た。コトネールには溫和な顏付きで云つた。

「うん、一寸好いね。あの眼が好いよ。其れから姿も、顏も……非常によく似て居る。而し、今して居るあの身振り、あの言葉、眦目だ。少しも似てない、ぶちこはしだ。」

而し、レノバーレスは、聲や身振りの似てない子娘を、懷しい亡妻に似せやうとあせつて居るかのやうに、驚嘆の聲をあげた。

「非常に美しい、いや綺麗な女だよ！」

而し、彼は自分勝手な皮肉な驚讃の爲め、却つて默り込み、そしてフレゴリーの爲めに辯明するやうに附け加へて云つた。

「だが、あの女は確かに似て居るよ。そつくりの姿だからね。コトネール、あの女は相當にしつかりして居るらしいぜ。第一、愛嬌深くつて、可愛いらしい處があるぢやないか。」

コトネールは皮肉に頭を振つた。第一回目が終つても席から立たずもせぬマリアーノが、第二回目も見やうとして居るのだと思ふと、彼は獨で歸らうと思つた。而し、無理强ゐされて、退屈な樂の音と野鄙な觀衆の叫喚の中に、うとゝ〳〵と眠つて了つた。暫くして苛々したレノバーレスの手は「コトネール、コトネール。」と、云つて、彼の甘い醉夢から起した。彼は頭を動かし、不興氣な眼をみはつた。「どうしたのか？」彼はレノバーレスの顏に反逆的な、そして嬉しさうな微笑を認めた。

「コトネール、好いことを思ひ出したんだ。一寸樂屋に行かうぢやないか。側へ行つて、あの女を見やう。」

コトネールは怒つて答へた。

「君は一體どうしたつて云ふんだ。馬鹿な高が淫賣女ぢやないか。馬鹿〳〵しいことを云ふのをやめろよ。」

レノバーレスは沈默した。而し、暫くすると懇願するやうに、そして壯重な態度で熱心に云つた。

「ね、コトネール、君一人で行つて呉れないか。君が見た方が、僕が見るより可いやうに思ふんだ。是非賴むよ。僕があの女の肖像を描き度いと云つて呉れないか。噫！ 本當に偉大な作品、僕の確實な製作にかかるんだ。」

コトネールは、此使を彼に賴まうとする藝術家の善良な坊ちやんのやうな單純さに驚き乍ら、笑ひ出した。

「有難う御座います。先生、君の信任を辱なく思ふよ。だがね、僕は行かない。……馬鹿〳〵しい骨頂ぢやないか！ 君はあの小娘が、レノバーレスとは何か？ ふゝゝゝ！ 恐らくは、あの種の女達の生活には、君の名は知れて居まいよ。」

畫家は子供のやうな單純さで驚異の眼をみはつた。

一そんなことがあるものか、レノバーレスの名を知つて居るよ。僕はさう思ふ。新聞に出てる名前を……僕の肖像だつて見てるだらう。……君が嫌やだと云ふのなら其れで可いよ。」

と、云つて、彼は彼の榮光の此隅にまで達つしないと云ふ友の否定を怒つて默り込んだ。第二回目が終ると、藝術家は觀覽に來たと云ふ章にベーリャ、フレゴリーナに、何か贈らないでは歸られぬ氣持ちになつて、美しく飾られた立派な花輪を花賣女から買つた。そしてあの令嬢に直ちに渡し度いと思つた。

「ええ、よろしゆう御座います。ペピータ嬢にですか。」

と、花賣女は此紳士が、彼女と特別な關係を結び度いのだらうと、如何にも馴れたやうに云つた。

「其れで、レノバーレス、畫家レノバーレスからだと云つて呉れ。」

其女は頭を動かし乍ら、彼の名を繰り返した。そして畫家から五ヅーロの金貨を貰つたが、少しの感激もなく、當り前だと云ふ風に行つて了つた。コトネールは友に對する尊敬を忘れて叫んだ。

「五ヅーロ！　氣狂ひ！　馬鹿らしい！」

善良なコトネールは、色々に忠告したが無駄だつた。熱心なレノバーレスは、毎晩のやうに出掛け、其度毎に、あの女から新らしい感銘を受けた。此頃は蒼白めた薔薇色の衣裳を着けて舞臺に現はれて居た。其れは彼の家の衣裳棚に藏つてある亡妻のものによく似て居た。特に花のついた大きな帽子は、亡妻の古い飾りの物の中にあるものと、非常に似て居た。噫！　如何に彼は哀れなホセフイーナを思ひ出して居たことか！　彼の懷しい想ひ出の斷片は、かうして毎夜の如くあの女によつて再生されて行つた。彼はコトネールの助けをからずに、彼女に會見しやうと、若い夜遊び好きな畫生達を誘つた。彼等は、如何にもあの女狐の遠い爪を知つて居るかのやうに、ある侮辱を以て彼女のことを語り合つた。而し、彼等は彼女の美を稱讃し、聖なる乙女、白百合と呼んで居た。青年達の探索によれば、彼女は彼の力以外にあつた。禮裝をした若い紳士達が、劇場の閉るのを待つて、彼女を夜食に誘はうと競つてると云ふことだつた。レノバーレスは彼女に逢ひ度いと思つて、增々苛々して來た。彼は毎夜の如く、大きな花束を彼女に贈つた。彼女は此樣な贈物の蔭にひそむ男の醜い要求を了解して居るらしかつた。何故となれば、彼女は看客の

中に年老いた紳士を見出して、毎夜の贈物に報ゐる爲めの微笑を向けて居た。彼女は其媚びた卑しい視線で、彼に報ゐて居るつもりだつた。

或る晩、藝術家は合唱團の或女に挨拶して居るローペ、デ、ソ！サを見た。婚を利用しやうと思つて、彼女に逢ひ度い、そして多年腦裡に描いて居た畫を實現する爲めに、モデル女として、彼女を雇ひたいことを賴んだ。

「あ。ペピータですか！　あの女は素敵な歌ひ手でしたよ。今は墮落してますがね。お父様が、あの女に逢ひ度いとおつしやるなら僕が御紹介しませう。譯けはありません。蚊のやうに飲む女でね。……獸女でさあ！」

と、彼は言ひかけたが、眞面目な舅の顔を見ると、彼も稍々眞面目になり乍ら、

「あの女は、直ぐ自由になりますよ。あのペピータは八方美人ですから……偉大な藝術家のモデル女になれると云つたら、却つて喜んで來ますよ。」

と、附け加へて云つた。

「金なら、あの女の好むだけやるよ。ぢや何分賴む、お前熱く話をして呉れ。」

欠

畫食時　コトネールは食堂で頭に油をつけ、髪を梳いて、短く髭をかり、美々しく裝つたレノバーレスを見ると、大聲に笑ひ出した。何と云ふことか！　確に馬鹿になつて居る！

レノバーレスはアトリエの中を一人で歩き廻つた。如何に時間を長く思つたことか！……三の室に來る人の跫音を聞くと、彼は驚いて振り返つて見た。深いベネシアナの鏡は、うづ高く盛られた大理石の花束を美しく映して居た。側の古びた時計の針は、遲く思はれてならなかつた。午後の三時は來た。……畫家は、彼女が來たかどうか不安げに質ねた。三時二十分、三時半になつた。而し、未だ彼女は來なかつた。

やがて跫音が聞えて來た。そしてコトネールが這入つて來た。

「來ましたよ。もう直ぐ此處へ來るだらう、僕は失敬する。」

と、云つて、コトネールは暇乞ひの爲め、皮肉な相圖の手を出して行つて了つた。レノバーレスは、彼女の注意を惹いたらしい立派な家具や畫額のことを說明して居るらしいローペ、デ、ソーサの聲を聞いた。

彼等は這入つて來た。彼女は、驚異の眼を見張つた。アトリエの崇厳な沈默に臆して居るやう

欠

に見えた。彼女がこれまで見たことのない何と云ふ立派な邸宅。そして立派なアトリエよ！……

…如何に傳統的貴重さを運ぶ古びた家具の立派さは、彼女に恐怖を抱かしたことか！　彼女は、尊敬の念を以てレノバーレスを見た。あの劇場の席で空洞な眼を見開いて居る人物とは全く異つた立派さを彼に見出したのだつた。そして彼女が劇場で出逢ふ人々とは違つた偉大な人物として彼に恐れを抱いた。此不安は或驚嘆に變つた。何んと云ふ素張らしい生活をして居る人か！

レノバーレスも亦、彼女にこんなに近く接近して、或情熱を感じて居た。彼は最初の瞬間、彼女に亡妻との類似點を見出さなかつたが、羞しげな身振りの、華奢な姿を見詰めて居る内に、段々亡妻の俤を見出して行つた。歌ひ女は、壁を蔽ふて居る畫を見て居た。何と云ふ美しいことか！すべてのあの畫を此人が描いたのか！……彼女は、あの額にあるやうに、美しく見られ度いと思つた。そして偉大な藝術家に美人と信じられて居るのに滿足し、女性らしい虛榮が、彼女の心に侵入して來た。

ローペ、デ、ソーサは、遲刻した理由として彼女の寢呆のこと、此種の女の普通であることを云つた。

「ぢや、ペピータ、僕は之れで失敬するが、お前は殘るんだよ。此人は僕の父だ。お前にもう云つてあつた筈だな、解つてるだらう。」

と、彼はアトリエの光景に魅せられて呆然としてる彼女に云ひ聞かせ、兩人の强ゐて作つた笑ひに送られて出て行つた。

二人は、苦痛な長い沈默を續けて居た。畫家は、どう云つたら可いか知らなかつた。彼女は燦爛たる贅澤な、そして崇嚴な此アトリエは、今迄見たものとは違つた偉大さ、美々しさで、其れが爲め、臆して居た。彼女は未知の手術を受ける漠然とした恐怖を感じ、恰も餓えの苦痛を感じて居るかのやうに、兩頰と唇を震はせ乍ら、彼女を射てつけたやうな彼の燃える眼に、心を騷がして居た。而し、直ちに其臆した氣は、不思議な沈默の中に見合つて居る無言の羞恥を、段々忘れさして行つた。彼女は、此會見は或躊躇を以て始められ、親しい馴れ〳〵しさに終ることを知つたのだつた。彼女は馴れた職業的の微笑を其顏に泛べて云つた。

「あの…、何處で裸になるのですか？」

レノバーレスは、此亡妻の幻影が口をきくことが出來るのを忘れて居たかのやうに、驚いて眼

をみはつた。

畫家は我れに返つて、彼女をモデル室に導いた。そして我れ知らずアトリエの入口の方を用心して見るのだつた。着物を抜ぐさら〳〵こした滑らかな音、ボタンをはずす金屬性の響きが長い沈鬱を破つた。こゝ、直ちに或臆病さを以た低い聲で彼女が云つた。

「あのー、下着も……脱がなければいけないのですか。」

レノバーレスは、凡てのモデル女は誰でもする最初裸體になる時の拒絶を知つて居た。父のこゝを心配して居たローペ、デ、ソーサは一糸も身につけぬやうに、完全に裸體になることを彼女に云つて居たのだつた。其れで彼女は畫家の言葉も待たず、約束してあつたことを思ひ出して裸體になつた。畫家は沈默を破つて、不安げに叫んだ。室の中に必要な衣裳がある。彼は頭を振り向けずに、盲目的に指をさした。其處には、薔薇色の衣服、帽子、靴、下衣、シャツがあつた。

ペピータは、其用ひ古したやうな衣服を纏ふことを嫌やがつて抗言した。

「シャツもですか、下衣も着るのですか。妾、衣服だけで充分だと思つてよ。」

而し、レノバーレスは熱心に懇願した。凡てが必要だつた。凡てを着けた彼女を描きたかつたのだつた。

彼女は高慢稚氣に微笑み乍ら、モデル室から出て來た。彼女は、此二十年以前に流行した衣服を着て劇場に出たら、觀衆の嘲笑を買ふのに極つて居るのだが、却つて華々しい拍手裡に舞臺に立つ時の身振りをし乍ら、小娘らしく喜悅して居た。彼女は此流行を知らなかつた。唯昔の流行衣裳だと漠然と考へて居たゞけだつた。畫家は安樂椅子から起ち上つて彼女を支へた。

「ホセフイーナ、ホセフイーナ。」

彼女は、彼が記憶の中に置いてある亡妻其儘の姿だつた。彼は、亡妻が薔薇色の衣裳を着け、大きな華麗な帽子を冠つて、丁度田舍廻りの歌劇女優のやうな姿をして、あのローマの山の美しい夏の日を歩いたことを思ひ出した。此流行は、今の若者達は笑つて居た。而し、彼にとつては彼の生活の樂しい最初の時代を思ひ出さす、女性らしい趣味にあつた藝術的な、最も美しいものだつた。

「ホセフイーナ、ホセフイーナ。」

而し、彼は恰も此夢幻の實在が消えはせぬかと恐れるかのやうに敢て彼女に話しかけやうとも

しなかつた。彼女は、此扮裝が藝術家に及ぼして居る効果を知つて滿足げに微笑し、遠い鏡に映る姿を見て、此珍しい服裝が却々美しいと云ふ事を認めた。

「何處へ坐りませうか。右の方へよつた方がいゝわね？」

畫家は、彼女の言葉を聞き度くなかつた。其聲は、勞働する女のやうな荒々しい聲だつた。彼は、彼女の好きなやうに坐らした。其れで、彼女は、最も可いと考へた姿勢で安樂椅子に身を凭せた。片足にもう一方の足を載せ、頰づえついて、身を斜に、劇場でよくやる其しなを作つた。

噫！ 愛する亡妻の肉體の芳香を漂はす其姿よ！

其瞬間、彼は習慣的に筆と繪具皿をとつて、其姿を描かうとした。噫！ 老いたる手よ！ 呪はれた苛責の手よ！……あの憧憬するものを自由に、そして情熱にかられて描いた時代の活き活きした手が何處へ飛んで行つたのか？ 彼は確實に畫家レノバーレスであつたか？、彼は忽ち凡てのことを忘れて了つた。彼の腦は空洞のやうに見え、手は無感覺にしびれ、白い畫面は、彼の心に未知の恐怖を吹き込むやうに思はれた。……彼は描くことを知らなかつた。忘れて了つた。無駄な努力だつた。彼の思想は盡きて了つた。今や、彼の聽覺は無限に震動し、彼の顏は哀

れにも蒼白め、恰も血の塊のやうに其耳朶は眞赤になつた。彼は臨終のかはきを其唇に感じた。

ベーリヤ、フレゴリーナは、繪具皿と筆を棄て、狂氣した獸のやうな顏をして、彼女の方に進む彼を見た。

而し、彼女は恐れなかつた。之迄にもよくこんな慾に燃えた男の顏を見て居た。莫大な金でモデルになつた以上、當然來るべき男の卑しい慾望が來たのだと信じた。此重々しい偉大な人物も畢竟は彼女の知つて居る男達と同樣だと思つた。彼は恰も今にも息が絶えるやうな炎の息をつき乍ら兩手を擴げ、力强い彼女を抱きかかへた。彼女は、職業の有力な武器である其挑發的な態度を以て、彼の望みを滿した。

此態度は、藝術家を氣狂ひのやうにした。

「ホセフイーナ、ホセフイーナ。」

幸福な時代の芳香は、熱愛した肉體を蔽ふて居る衣服から漂つて來た。亡妻の衣服、亡妻の肉体！ 彼は猛烈に女の身體に觸れ乍ら、無限の希望を果し得た有頂天の喜悅のため、氣絶して死にたいやうに思つた。……彼女は、此氣狂ひ、此肉の心醒者に、無言で身をまかして居たが、

底深く光る鏡に映つた彼女の眼、皮肉な職業的な好奇な瞳は冷やかに輝やいて居た。

レノバーレスは、其冷めたい瞳の躍動を見ると、驚愕の爲め、脊から水を入れられたやうに感じ、悲しい瞞著の雲の霧れたのを見た。

彼の腕に抱へて居る女は、實際にホセフイーナでなかつたのを?……彼女の肉体、彼女の芳香、彼女の衣服、あの死にかかつた花のやうな青白めた美しさ……而し、彼女ではなかつた。亡妻ではなかつた。彼女の魂は、彼女の肉體は、永久に失せて了つたのだ。午後の美しい陽燦は白々しくも、卑しい歌ひ女を輝やかした。

レノバーレスは、愚かしい抱擁から離れ、恐ろしい眼で、女を見詰め乍ら、後ずさりをした。そして顏を兩手で蔽ふて安樂椅子にくずれ落ちた。

彼女は、恐ろしい男の泣き聲を聞いて、着物を拔いで、逃げやうとモデル室に飛び込んだ。此紳士は 完く氣狂ひだと思つた。

藝術家は泣いて居た。……左樣なら、青春よ! 左樣なら、希望よ! 左樣なら、幻よ! 左樣なら、永久に失せて了つた現實の魂するが如き幻怪な美よ! 彼は無用にも求めて居つた。

無用にも、生活の孤獨の中に戰つて來た。死は確實に彼を捕握して居る。色々な幻は無用なものだつた。彼は、もう腕に抱いたあの金で借りた女からは、もう妻の記憶を甦らすことは出來ないだらう。

眞實に獨れた嚴肅な瞬間に、青春の夜、憧憬した裸體の女、ホセフィーナの肉體を蔽ふて居る無限の或ものは消えて了つた。

幻滅の悲哀! 死の地平を見まいと、最後の旅行に畢生の幻を運んだ努力は、虛僞の到達だつた。彼の殘された最後の道程は、空寂なものである。彼の旅行を長びかさうと、路での休息を感じたが無駄な努力だつた。若し休息を長びかさうとしたならば、より一層其れに伴つて、恐怖の苛責があるだらう。彼は、再び歸ることの出來ぬ偉大な所有、眞黑い貪慾な咽喉……死……其旅行の最後の恐怖なく、雲のない、晴れやかな路上を、否、其餘生を見詰め、そして努力しやうとした。

——(完)——

大正十三年五月十五日印刷
大正十三年六月[illegible]日發行

定價金二圓三十錢

不許◈復製

イバーニエス原著
◀女の体裸▶

譯者　中代富士男
發行者　又間安次郎　大阪市南區安堂寺町四
印刷者　河野圭藏　大阪市外下三番町二五

振替口座　東京四九二八番　大阪一二九〇〇番

發所行　東京市神田區多町一丁目　大阪市南區安堂寺町四　精華堂書店

529
13

終